

子どもたちの明日

Children, Our Future

2015年7月

114号

目次

- ・ 村の幼稚園の1日～チュティール村～ 1頁
- ・ おおぞら保育園・やまゆり保育所のこれから 2頁
- ・ 卒園児の「今」 4頁



生まれて初めて受けた手洗い指導に、子どもたちの笑顔がはじけました（チュティール村の幼稚園）

1 村の幼稚園の1日 ～チュティール村～

現在、CYK / CYR は村の幼稚園9ヶ所の運営支援を行い、村の人々に協力を呼びかけ、村人による自主運営に向けて取り組んでいます。2014年度に開園した「チュティール村の幼稚園」の1日をお伝えします。

村の幼稚園ができるまで

プノンペンから車で1時間ほど離れたカンダール州チュティール村は、砂糖ヤシの木が生い茂るのどかな農村です。村人の多くが農業や縫製工場で働き生計を立てていますが、1日の収入が1ドル以下という家庭も珍しくなく、貧しい生活をしています。子どもの数が多いチュティール村ですが幼稚園はなく、小学校は村から3kmほど離れています。そのため、昼間、6歳以下の子どもたちは隣家に預けられたり、近所で遊んだりして過ごしています。チュティール村の隣村では、目が悪いお年寄りに預けられていた兄弟が池に落ちて亡くなるという悲しい事件がありました。「子どもたちが安全に過ごせる場所が欲しい、子どもたちに教育を受けさせたい」との村人の願いを受け、村の幼稚園が誕生しました。

村の幼稚園の一日

村の幼稚園には現在22人の子どもたちが通っています。子どもたちはみんな仲が良く、毎日のびのびと過ごしています。「子どもたちを教えるのがとても楽しい」と言う保育者のソック・ピン先生は厳しい先生ですが、子どもたちに慕われています。

村の幼稚園の一日は朝7時に始まります。登園した子どもたちは、カンボジア国歌「コールトゥンチアット」を歌い、体操をしてから教室に入ります。教室では礼儀作法や文字・数を学びます。おやつの時間になると、子どもたちは進んで手を洗い、列を作っておやつを受け取ります。子どもたちはこの時も、合掌してお礼を言うことを忘れません。そして10時の帰りの会までお絵かきやなどなぞをして楽しい時間を過ごします。

子どもたちにとって、幼稚園は勉強だけでなく、友だちとの関わり方や衛生習慣を学ぶ場所でもあります。幼稚園に通うようになり、子どもたちは積極的に手洗いをし、トイレも正しく使えるように

なりました。幼稚園で手洗いの大切さを覚えた子どもは、家でも家族に「ちゃんと手を洗ってください」と伝えているそうです。ある道徳の時間には、先生が子どもたちに「お友だちと遊んでいる時、お友だちを押して転ばせてしまいました。あなたはどうしますか」と尋ねました。すると、子どもたちは口をそろえて「そのお友だちを起こして、ごめんなさいと謝ります」と答えました。当たり前のことのように、幼稚園で集団生活を経験して初めて、子どもたちは友だちを大切にすることを学びます。村の子どもたちは、毎日たくさんの「初めて」を積み重ねて成長しています。

村の幼稚園ができてから、子どもたちの衛生状態や態度が変わったと地域評議会のトゥーイ・アートさんは言います。「子どもたちは大人に会うと、礼儀正しく挨拶ができるようになりました。また、汚れた服を着ている子どもも少なくなりました。子どもたちが幼稚園で元気に遊び、真剣に学ぶ姿に、保護者だけでなく村人全員が喜んでます。」

おおぞら保育園・やまゆり保育所のこれから

2011年3月11日に発生した東日本大震災から4年が経過しました。

CYRはこの4年間、会員・支援者の皆様のご協力を得て、福島県と宮城県での支援活動を行ってきました。震災発生直後より、子どもたちの保育を続けてきた2つの保育施設の「これまでとこれから」をお伝えします。



左2枚：太陽を浴びて、風の音を聞いて、土の香を感じて…子どもたちは自然の中でのびのびと育っています
右：安心、安全な食材で作られたおいしい給食は、子どもたちの元気の源です（おおぞら保育園）



○宮城県多賀城市「おおぞら保育園」 園長：黒川恵子先生

地震の発生と避難

子供たちは午睡中、職員たちは連絡帳を書いていた時、激しい揺れが園舎を襲いました。すぐにベビーカーを保育室の中央に集めて子供たちを乗せ、配達に来た郵便局の人にベビーカーと一緒に押さえてもらい、2歳以上の子供たちには布団を被せて、地震が収まるのを待ちました。

避難をする途中、高台にある多賀城市文化センターに避難する人の行列を前にして、列を横切って小学校に行くか、それとも行列に混ざり文化センターに行くかで迷いました。しかし、前日に「災害の際は多賀城八幡小学校に避難します」とお知らせしていた通り、雪が降る中、トトロの「さんぽ」を歌いながら川沿いの道を歩き続けました。

避難先の小学校では子供たちは静かに保育者の声掛けに従い、ぐずることもありませんでした。それほどショックが大きかったのだろうと今更ながらに可哀想に思いますが、同時に「良く辛抱したなあ」と子供たちを褒めてあげたい気持ちでいっぱいです。

トレーラーハウスでの保育

保育を続けるため、2011年4月から市内の借家を探しましたがいい物件

が見つからず、年末になってトレーラーハウスの購入を決めました。子どもたちは初めて見るトレーラーハウスに興味津々で「狭いながらも楽しい我が家」といった様子でしたが、ハサミ遊びをするときには、いつも以上に保育者の配慮が必要でした。石ころだらけの園庭で最初はよろよろと歩いていた子が、いつの間にか平気で走り回るのが見えた時には驚きました。今になってみると、かえって体幹を鍛える機会になったのかな？と職員間で話しています。園の前を通る他の幼稚園バスに手を振ったり、小学校のお姉さん達が学校帰りに遊んでくれたりと、近隣の皆様にとっても可愛がってもらえました。ただ、狭い中で19名の子供たちが午睡をしていたため、泣きだす子や寝ない子がいる時には、職員が交代でおんぶしたり、ベビーカーに乗せて園庭や近くの公園に行ったりと汗だくで対応した日々も昨日のこのように思い出します。それでも、トレーラーハウスは、職員だけでなく全ての保護者が子供たち全員の成長を感じられる、温かい保育室のような空間でした。

新しい園舎への引越し

手作り給食を子供たちに食べさせたい、小規模保育を実施したいとの

思いから、園舎探しを再開しましたが、この時も物件探しは難航しました。2014年6月、私の通勤路沿いでクロスの張替工事をする一軒家を見つけ、9月からの賃貸の了解を頂いた時は天にも昇る思いでした。引越し後の園舎では、子供たちは探検するようにあっちをキョロキョロ、こっちをキョロキョロ。しばらくは落ち着かない様子でした。職員は大きいクラスと小さいクラスに分けて年齢に適した保育ができるようになり、保育士として今までできなかった事が出来る喜びに溢れています。

震災から4年が過ぎ、この4月より市認可の小規模保育施設となりました。保護者の方にとって保育料の負担も少なく、安心して預けられる保育園となり、職員の待遇面や仕事のしやすさも改善しました。また、手作り給食も好評で、保護者の方々は給食を見て「家でも作りたい、美味しそう」と、管理栄養士の作る献立に満足して頂いています。保護者の方々と子供たちの笑顔が、明日の保育への意欲に繋がっているように思います。

これから

今後は、子供の心を育てる保育の実践と保護者の方に選ばれる保育園を目

指し、職員が研修会に参加できる環境も整えたいと考えています。しかし、費用面と人員不足により、現在はその機会も限られています。

私たちの仕事は、これからの日本を支える大切な子供たちを保護者や地域の皆様と一緒に見守り育てる仕事です。そのため、保育者自身の魂の向上を心がけ、豊かな人間力と愛が育つ環境作りをしたいと考えています。今後は近くのデイケアセンターに通うお年寄りとの交流など、人との関わりも楽しみたいと計画しています。

東日本大震災にはとても言いがたい、悲しい思いがありますが、全国の皆様からの暖かいご支援と励ましの真心を頂きましたことに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

○福島県飯館村「やまゆり保育所」 所長：中井田多美子先生

震災発生10日後に再開した保育所

福島県飯館村にある唯一の保育所「やまゆり保育所」は、0歳から3歳までの子どもたち53名を預かり、職員が毎日一生懸命、心を込めて保育に取り組んでいました。いつもと変わらない3月11日の午後、あの恐ろしい地震、そして思いもよらない原発事故が起こり、飯館村を離れて避難生活を余儀なくされました。今振り返ってみると、その時は「放射能のマイクロシーベルトって何？」「どれ位の値が安全なの？」「何が危険なの？」など

子どもたちの気もちに寄り添った温かい保育所で、子どもたちは元気に過ごしています（やまゆり保育所）



恥ずかしながら、放射能や原発についての知識がありませんでした。しかし、「保育所はいつ始めてくれますか？」という保護者から多くの問い合わせがあり、早く再開しなければという一心で原発事故から10日目に保育を再開しました。そして、その1ヶ月後には避難指示により隣町にある空き施設をお借りして保育を継続、現在に至っています。

やまゆり保育所のいま

この先の不安を常に持ちながらも、飯館村長（当保育所の理事長）の「一人でも村の子どもを保育所に預けたいという方がいる限り、保育所を続けて行こう」という言葉に背中を押されて、頑張ることができています。一方で、「いつまでこの原発事故の被害者というレッテルを背負って生活をしなければならぬのだろうか」と自問自答の日々を過ごしていました。また、子どもたちは、豊かな自然に触れることで「五感を養える時期」なのに、虫や植物に直接触れることすらできないという状況に、どうすれば良いのだろうかとうと途方に暮れたこともありましたが、しかし、いつまでも後ろ向きではられません。最近は、「自然いっぱい美しい村に戻ることが困難だとしても、“人間としての生き方まで汚染

色づき始めた苺に興味津々な子どもたち。自然に触れて、子どもたちの好奇心が育ちます（やまゆり保育所）



されるなんて嫌だ”」、そして「今おかれている環境で私たちができる最大限・最良の保育をしたい」との思いから、安全な土を買い、植物や野菜を栽培し、できる限りの自然を体験させてあげようと努めています。職員の数は震災前の3分の1に減り、預かることができる子どもの数も限られてしまっていますが、前向きに、そして全力で保育に取り組もうと頑張っています。

これから

この4年間を振り返ってみると、大変なことも多くありましたが、その反面、この事故から経験できたことや、支えてくれた沢山の方々にも出逢えたことなど、良いこともありました。これからは、帰村となった場合、やまゆり保育所がどうあるべきかを、関係機関と連携を取り合い、真剣に向き合う必要があります。子どもたちは将来の飯館村を守ってくれる大切な宝です…その子どもたちと保護者のために、全力を尽くして保育に取り組みたいと思っています。またいつか村に戻れた時「やまゆり保育所に子どもを預けたい！」と思っただけのよう、子どもたち一人ひとりを大切にしたい保育を続けていきたいと思っています。

CYK / CYRが発足してから35年、カンボジアで保育所を開いてから24年が経ち、これまで多くの卒園生が保育所を巣立っていきました。保育所で元気に遊び、学んでいた子どもたちは、どうしているのでしょうか。卒園児の「今」をお知らせします。

今回、ご紹介する卒園生は、1998年にバンキアン保育所を卒業したソック・チャナポットさん(24歳)です。

バンキアン保育所での思い出と、卒園後の進路を教えてください

保育所ではお絵描き、ぬり絵の時間が楽しかったです。子どもの頃は本を読むのも好きでした。保育所での経験はとても役立ちました。小学校の入学前から文字を知っていたので他の人より勉強が楽でした。それに、保育所ですでに友だちができていたこと、集団生活に慣れていたことはとても良かったです。

卒園後はバンキアン小・中学校、ブレイクスレン高校に進学しました。その後、2012年から2年間奨学金をもらって、プノンペンのTayama Collegeで日本語を学びました。仕事は日本語の翻訳とウエイターをしていましたが、ウエイターの仕事は最近辞めてしまいました。

日本語を勉強しようと思ったきっかけは何ですか？

日本人と働きたい、日本へ行ってみたいと思ったことがきっかけです。実は、最初はあまり日本語自体に興味はありませんでした。でも、勉強するにつれてどんどん面白くなりました。今は学校に通ってないので、日本語は独学です。日本人の友達とフェイスブックやLINE(無料通話アプリ)でチャットをして、教えてもらいながら学んでいます。

Tayama Collegeでの生活はどのようなものでしたか？

学校では日本語だけでなく、日本の習慣やビジネスマナーも学びました。例えば「たった2分でも遅刻してはいけない」などです。皆勤賞をもらうために、風邪をひいても授業に行っていましたね。そして、修了時には皆勤賞をもらうことができました。

将来の目標を教えてください

いつか日本に行ってみたいです。そして、日本に行ってボランティアもしたいです。将来は、日本語の先生やガイドとして働けたらいいと思います。そのために今、一生懸命勉強しています。また、将来子どもができたなら、ぜひ保育所に行かせたいとも考えていま



チャナポットさん(右)と、お母さんのソー・マライ先生(左)

す。その方が自分も仕事に集中できるし、子どもも勉強できますからね。

お母さんであり、長年バンキアン保育所で働いているソー・マライ先生より

私は二人の息子を学校へ送るのにとっても苦労しました。大学はプノンペンなので、私の給料では足りず、CYKや親戚にお金を借りました。息子には納得がいくまで勉強を続けてほしいです。そして、良い仕事に就いて、家族の生活も支えてくれたら嬉しいですね。

息子たちはよく勉強して、勉強を続けるためにアルバイトもしています。それは多分、小さい時から楽しいこと、好きなことをして勉強できたからでしょうね。息子たちがとても良い子に育っていることが、私の誇りです。

今後は日本語を活かして仕事をしたいというソックさん、実はインタビューの2日前に日系企業での面接を終えたところだったようです。将来の目標が達成できるといいですね。

CYR 情報

夏季休業のお知らせ

2015年8月12日(水)～16日(日)の間、夏季休業とさせていただきます。8月17日より、通常業務を再開いたします。

カレンダー発売のお知らせ

2016年カレンダーの製作・販売が決定しました。現在、写真家・高橋智史さんが、カンボジアの子どもたちの様子を撮影してくださっています。9月上旬より発売予定ですので、ぜひお買い求めください。

ニュースレターの発行回数の変更

ニュースレターの発行回数に変更になり、年3回(7月、11月、3月発行)になります。今後は、年3回発行するニュースレターに加え、当会ホームページやフェイスブックでもカンボジアの様子をお伝えします。

子どもたちの明日 114号

発行日：2015年7月15日 発行者：廣戸直江

特定非営利活動法人幼い難民を考える会

東京事務所(CYR)

〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11 青木ビル2A
TEL: 03-6803-2015 FAX: 03-6803-2016
Email: info@cyr.or.jp URL: http://www.cyr.or.jp/

プノンペン事務所(CYK)

#170, St.63, Boeung Keng Kang I, Khan Chamkarmorn, Phnom Penh, Cambodia
TEL: (+855) 23 210849 FAX: (+855) 23 210849
Email: info@cyk.org.kh URL: http://cyk.org.kh/

幼い難民を考える会(CYR)は認定NPO法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。